

佐伯の山際の武家屋敷の写真をご恵送して下さいだったので、敢て拙稿を草して追悼のこぼを贈り、謹んでお悔み申し上げることとする。

高木嘉吉佐伯史談会々長の追悼文を読み、一層その感  
を深くした。

先生は昨年春、風邪をこじらせて肝臓を悪くし、肝硬  
変へと進行して亡くなられたと始めて知った。診ていな  
いので確信は出来ないが、恐らく全く感冒の症状と同じ  
の急性肝炎にかかり、絶対安静せねばならぬのに、先生  
の熱烈な責任感が病勢をつのらせて死期を早めたのでは  
なからうかと思ひ、残念で気の毒に耐えない。七十七歳  
と言へば、一応年に不足はないかも知れないが。

生前先生自ら手がけた『佐伯史談』のエネルギーシ  
ュな謄写版印刷の流麗な文字を拝見、また時々投稿され  
いた大分合同新聞の「灯」の文章を拝読するたびに、せ  
ひ一度先生にお目にかかつて、いろいろご示教を賜りた  
かったが、もうそれも及ばない。史談会のため、佐伯の  
ため否世のため、まことに惜しい人材を失ったと嘆息す  
るのみである。先生の詳細な業績については高木会長さ  
んの追悼文を一読すればよく判る。

先生は郷土佐伯の爲め、ローソクの炎の如く、その生  
命を燃え尽くして倒れたのである。以って冥す可しとい  
うべきか。男子の本懐と申すべきか。

良寛禪師曰く「人間は死ぬる時節には死ぬるがよく候、  
これぞこれ災難をのがれる妙法なり」と。生者必滅。会  
者定離は世の定め、いずれ我々も近いうち、この世を去  
って先生の膝下へ馳せ参ずる。そのときはゆっくりお目  
にかかつて、お話を承りたい。先生のご冥福を祈ってペ  
ンを擱く。八重さん、ご主人のみ霊の守護へお努め下さ  
い。

合掌

最後にゲーテの言葉を捧げる。

「最大の奇跡は自分が生きていることだ」

## 回想 羽柴 弘先生

案 浦 照 彦

(会員・福岡県春日市)

時はたしか、昭和四十七年のころと思います。臼杵の  
高橋長一先生の御紹介で、羽柴先生とお会い致したのが  
最初でした。

当時、私は陸上自衛隊第四師団に勤務致して居り、『鎮

西の風雪』と後に本となりましたが、その取材に参った時のことでした。先生は早速高木会長はじめ、史談会の有志を集められました。それは堅田合戦のことを知りたいたいとお願ひしたからです。

その次は西南の役、陸地峠の戦闘を調査するため、佐伯を訪れました。前回より数年経過していました。龍護寺の御自宅に伺いますと、「田に行っている」と奥様が申されます。龍護寺の稲の穂が黄色く、あちこちの田は刈とられ、その田圃の一角の道路にジープを止め、挨拶致しますと、広い田の中に、野良着で笑顔を私の方に振り向けました。その姿が今に印象に残っています。

それからお自宅に伺い、例のガリ版のある部屋で、柿を馳走になりながら四方山の話を承り、御城の奥、図書館から少し離れたところの旅館（名は失念）をお世話下さいまして、夕餉を共にいたしました。

『兵旅の賦 明治・大正』が完成し、贈呈のためお伺ひした時が三回目でした。なぜならば、先生から熊本鎮台の西南の役の日記を拝借していたからです。

遠来のあまり御交際の少い人にも、親身になって、その人の欲しいものを御世話下さるその人徳、佐伯の顕彰

すべき人間の一人ではないでしょうか。

私の手許に御送付頂いたガリ版の『佐伯史談』がございませう。新に印刷となってからも史談を毎月送って頂きました。有難く頂き、御礼を兼ね浅学でありながら、勝手なことも羅列いたしましたのですが、一度も御叱声なく、黙々と御送付頂きました。

ところが御亡くなりなされた時は、韓国に取材の旅にかけて居り、今月号を見て驚倒した幸いです。やはり佐伯と福岡は遠かったと、しみじみ思っているところで

す。

時は少しも待つてはくれません。もう少し御存命ならば、次の本『海狼記』を御贈呈できたものと、遅々とした自己の人生が悔しくてなりません。

## 故羽柴 弘氏の長逝を悼む

佐 伯 八重子

（賛助会員・宮崎市）

故羽柴氏の御逝去を悼みその御遺徳を偲んで一文を寄せます。

氏は、我が祖先遺領の地、豊後佐伯に生れ育ち、教職